



第3回勉強会

環境編

気候変動・生物多
様性・環境保全

2020年6月21日

於 JICA 地球ひろば/オンライン

森のコーヒー勉強会報告書

アフリカ理解プロジェクト

JICA 森林コーヒープロジェクト

森のコーヒー勉強会 2020

今、世界中で愛飲されているコーヒーは、エチオピアの森がふるさとです。オロミア州から南部諸民族州にかけて、原種コーヒーノキの自生する森が広がっています。この森や原種コーヒーノキは、私たちと無縁ではありません。「環境」「生物多様性」「文化」をキーワードにエチオピア、森林、コーヒー、そして私たちが考えるべき課題について勉強してみましよう。

アフリカ理解プロジェクトは JICA がエチオピアで実施している「森林コーヒープロジェクト」との共催で、森のコーヒー勉強会を 4 回シリーズで開催します。

- 第 1 回：導入編 1 月 12 日 駐日エチオピア大使館
- 第 2 回：経済編 2 月 9 日 JICA 地球ひろば
- 第 3 回：環境編 6 月 21 日 JICA 地球ひろば/オンライン
- 第 4 回：行動編 9 月 20 日 JICA 地球ひろば/オンライン

◆ 第3回勉強会

第3回勉強会は、「環境編：気候変動・生物多様性・環境保全」をテーマに、コーヒーの流通と認証制度の仕組みから、気候変動や経済の変化と私たちの消費の関係を考えてみました。

開催日時：2020年6月21日（日）14:00-16:00

開催場所：JICA 地球ひろば/オンライン

参加者数：58名

プログラム

1. 勉強会の概要説明
2. 地球規模の課題に向けた生物多様性保全の取り組み：阪口法明（国際協力専門員）
3. 森と人々を守る：高橋康夫（IGES：地球環境戦略研究機関）
4. コーヒーツーリズムの可能性：鈴川雅未（元青年海外協力隊）
5. 質疑応答

モデレーター：吉倉利英（JICA 森林コーヒープロジェクト）



◆開会のあいさつ（白鳥清志：アフリカ理解プロジェクト）

「森のコーヒー勉強会」は、アフリカ理解プロジェクトと JICA のエチオピア森林コーヒープロジェクトが共催する、環境、生物多様性、文化、人の暮らしを、エチオピア南部の自生コーヒーを通じて学ぶ勉強会。4 回シリーズの 3 回目となる今日は、60 名近くの参加者を得て、講師と運営スタッフは JICA 地球ひろばから、参加者の皆さんはオンラインでという、ハイブリッド形式で行う。アフリカ理解プロジェクトとして初めてのオンライン・イベントなので、不慣れな点多々あるが、皆さんの協力で成功させたい。本日は 3 つの講義、休憩をはさみ質疑応答のプログラムで 16:00 まで行う。皆さんからの活発な質問やコメントを期待したい。どうか、今日の勉強会を楽しんでいただきたい。

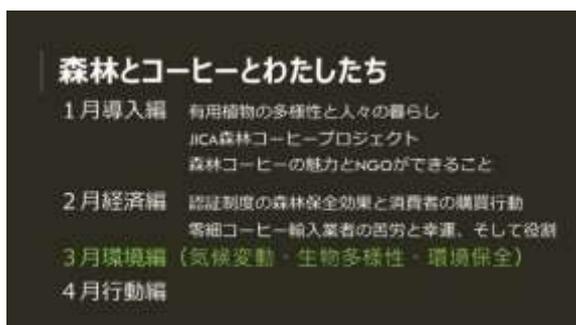
◆ファシリテーター（吉倉利英：JICA 森林コーヒープロジェクト）

アラビカコーヒー発祥の地といわれ、野生コーヒーが自生する、生物多様性をはぐくむエチオピアの森林は、経済環境の変化や気候変動で、その保全が危うい状況にある。認証制度による森林保全と住民の生計向上の試みが行われてきたエチオピアの森林を題材に、森林、森林コーヒー、そこに暮らす人々、コーヒー消費を持続させるより良い仕組みを考える、4 回シリーズの勉強会だ。当初 3 月に予定していた第 3 回勉強会を本日開催する。

第 1 回勉強会（1 月）は導入編として、京都大学の重田教授から「有用植物の多様性と人々の暮らし」と題する基調講演と、吉倉による「JICA 森林コーヒープロジェクトの紹介」、アフリカ理解プロジェクトの白鳥より「森林コーヒーの魅力と NGO ができること」という二つの発表を行った。野生のコーヒーが自生する森、そこに住む人々、森林資源を活用しながら森林保全を進める事業、森林コーヒーの魅力についての話とそれらに続く活発な議論が行われた。

第 2 回勉強会（2 月）は経済編として、早稲田大学の高橋准教授から「認証制度の森林保全効果と消費者の購買行動」、有限会社アフリカンスクエアの牛尼代表から「零細コーヒー輸入業者の苦勞と幸運、そして役割」という発表があり、森林とコーヒーと私たちを結ぶ仕組みの話をしていただいた。

第 3 回勉強会の今日は、国際協力専門員の阪口氏から「地球規模の課題に向けた取り組み」、エチオピアのプロジェクトに従事したこともある地球環境戦略研究機関の高橋氏から、プロジェクトでのご自身の経験も含めた「森と人々を守る」、そして元エチオピア青年海外協力隊員の鈴川氏から、現地の州政府観光局で働いた経験「コーヒーツーリズムの可能性」をお話いただく。森や住民の暮らしを守るための方法について、日本に住む我々ができることを考えるために理解を深めていただければと思う。



◆発表 1

地球規模の課題に向けた取り組み

阪口法明

独立行政法人国際協力機構（JICA）地球環境部
国際協力専門員。

動物生態学が本来の専門分野。環境省では、現場においてイリオモテヤマネコ、ジャワヒョウなど希少種保護活動に従事し、野生動物保全と人々の豊かな暮らしの両立の難しさを体感するとともに、課題解決に取り組んだ。一方、生物多様性条約、ワシントン条約、IPBES など、国際社会における生物多様性保全に関する議論に参加するとともに、国際協力にも取り組んできた。現在、JICA で生物多様性保全と持続可能な開発のための国際的コミットメントや途上国の政策ニーズを現場において具体化し実現することに取り組んでいる。



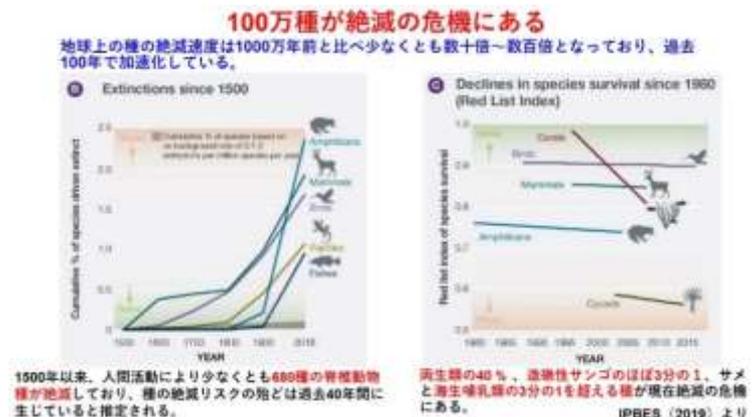
生物多様性に関する国際的コミットメント

生物多様性に関して様々な国際条約があるが、生物多様性条約は他の関連条約を補完する枠組み的条約である。生物多様性は SDGs（持続可能な開発目標）とも深い関係にある。SDGs の 17 の目標の相互の関係を表す「ウェディングケーキ図」は、経済（Economy）、社会（Society）、生物圏（Biosphere）を三層構造で示し、生物圏が、社会経済活動の基盤になっていることを示している。

2010 年愛知県名古屋市で開催された第 10 回生物多様性条約締約国会議では、長期目標「自然と共生する世界の実現」、短期目標「生物多様性の損失を止める」の下に、5 つの戦略目標と 20 の個別目標を設定した愛知目標が採択された。締約国は 2020 年までに愛知目標を達成すべく取り組んできた。

地球規模で見た生物多様性の状況

地球規模の生物多様性の状態と、その変化をもたらす要因等について評価した「IPBES 生物多様性と生態系サービスに関する地球規模評価報告書」が 2019 年に公表された。生態系サービスとは「人々が生態系から享受する利益や福利」のことで、供給（食料、材木、薪炭等）、調整（水源涵養、自然災害リスクの低減化、気候変動緩和等）、文化

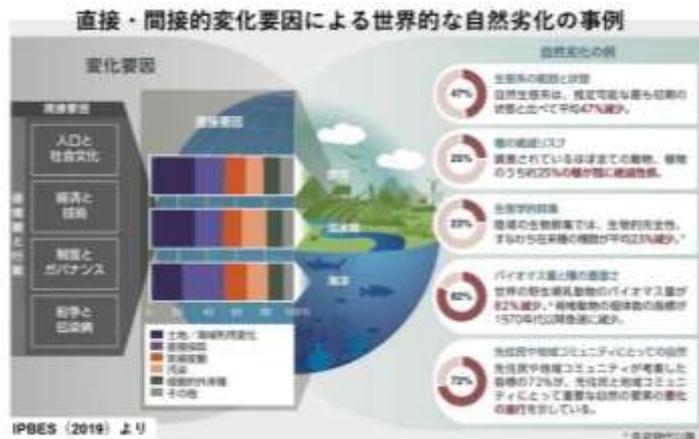
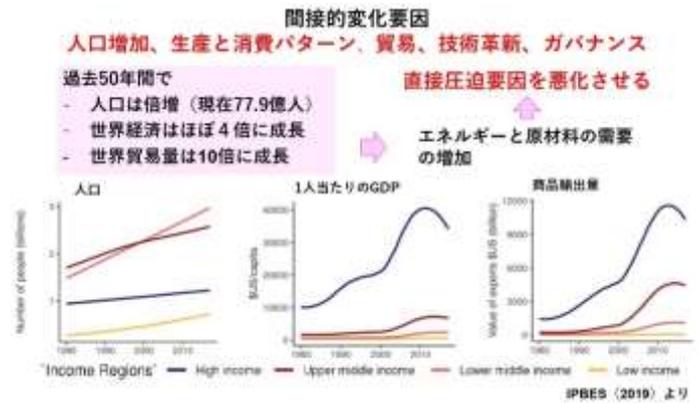


(レクリエーション、観光、信仰・祭祀等)、基盤（一次生産、水・栄養塩の循環、有機物の分解等）という4つの区分がある。報告書概要は下記の通り。

生物多様性と生態系サービスは世界的に悪化している。地球上の陸域の75%は複数の人為的圧迫要因により大きく改変された。具体的には、森林は1990年から2015年までに森林面積は290百万ha(6%)減少、湿地の85%以上が消失、沿岸域では1970年代以来、サンゴ礁で生きたサンゴの被覆が半減した。この500年で、人間活動により少なくとも680種の脊椎動物種が絶滅し、現在、地球上の動植物種のうち100万種が絶滅の危機にある。

人間活動による直接的、間接的な変化要因が過去50年で増大している。陸域における直接変化要因には、「土地利用変化（農地拡大）」「動植物の過剰採取」が挙げられる。過去50年間で、世界の森林・湿地・草地の1/3超が人間活動を支えるために、牧場やゴム園等のプランテーション農園に変化した。気候変動（平均気温の上昇、異常気象、海面レベル上昇）はまた、生物多様性に大きな影響を与えている。間接的変化要因には、「人口増加」に伴う、「生産と消費」、「貿易」等の増加が挙げられ、これら一連の要因によりエネルギーと原材料の需要が増大し、直接的変化要因をさらに悪化させる。

このような人間活動による複合的な変化要因が、「自然生態系の減少」「種の絶滅危機」等の世界的な自然劣化を引き起こしている。生物多様性の保全と持続可能な利用は、このままでは達成できない。目標達成に向けては、経済、社会、政治、技術すべてにおいて変革（Transformative Change）が求められる。人間活動による複合的な変化要因に同時に対処し、社会変容を達成させるには、レバレッジ・ポイントを見出し介入することが必要である。レバレッジ・ポイントとは、槓子（てこ）の力学原理で、複数の課題の相互関係を理解した上で、一つの効果的な介入により複数課題に同時に対処し、大きな変化を起こせるポイント（支点）のこと。ペレテ・グラの森を例にすると、私達が認証された森林コーヒーをより多く購入することで（レバレッジ・ポイント）、付加価値化による上乗せ払いにより地域住民の生計が向上し、森林保全へのインセンティブが働き、森林の保全と自然資源の持続可能な利用を同時に達成することができる。レバレッジ・



ポイントを効果的に特定し介入するためには、行政だけでなく、地域住民、企業、NGO その他ステークホルダーが参加し、科学的情報に基づく順応的管理を通じた、統合的なガバナンス・アプローチが必要である。

生物多様性保全のための新たな目標と必要な取り組み

(1) ポスト 2020 年地球規模生物多様性枠組みの検討

愛知目標の達成状況を受けて、ポスト 2020 年地球規模生物多様性枠組みが検討されている。2020 年 1 月に公開された生物多様性枠組み草案（ゼロドラフト）では、2050 年までの長期目標は愛知目標と同じ「自然と共生する世界の実現」であるが、2030 年までの短期目標を「2030 年までに生物多様性を回復へと導く」としている。具体的には、陸域、淡水域、海域生態系において 2030 年までにゼロ・ネットロス（悪化を止める）を達成し、2050 年までに [20%] *増加させ、生態系の強靭性を確保することとしている。

*数値はあくまでも暫定的で、数値目標及び基準年は今後議論される。

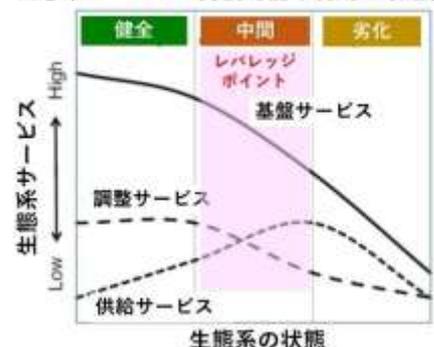


ポスト2020年生物多様性枠組み検討のための第2回公開作業部会
(2020年2月・ローマ) 生物多様性条約ウェブサイトより掲載

(2) 生態系サービスの持続可能な利用と最適化

複数の自然資源や生態系サービスから恩恵を享受し、持続的に利用していくためには、科学的データに基づき、それら関係性を明らかにし、最適化ポイント（レバレッジ・ポイント）を探る必要がある。生態系を「健全」「中間」「劣化」の3つに分けて生態系サービスの関係性を見ると以下ようになる。健全：保護区として森林伐採や資源採取の禁止により供給サービス利用が制限されている場合が多く、基盤・調整サービスは最も高い状態 → 中間：供給サービス利用と基盤・調整サービスはトレード・オフの関係となり、供給サービスの利用により基盤・調整サービスは低下 → 劣化：供給サービスの過剰利用が継続すると、全てのサービスが低下し、生態系は劣化。供給サービスの利用と基盤・調整サービスのバランスを保つことで、保全と農林水産業・観光等の持続的発展を同時に実現できる。

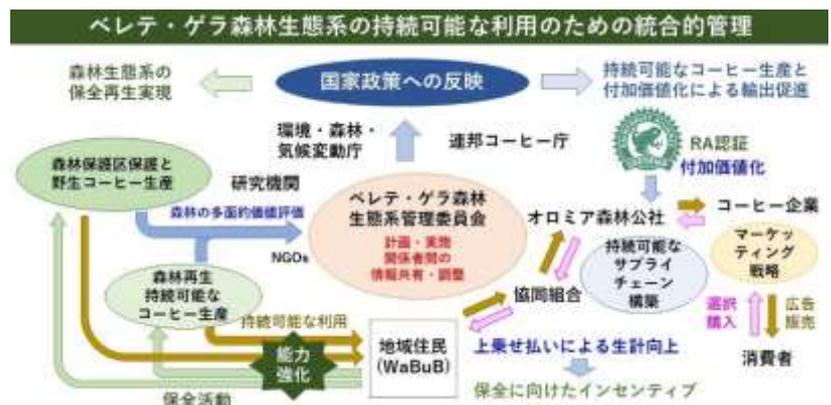
生態系サービスの持続可能な利用と最適化



生態系の状態と生態系サービスの関係に関する概念図
Nakaokaら (2014) をもとに作成

(3) 統合的生態系管理アプローチ

生態系を持続可能な形で保全管理していくためには、セクター横断的な利害関係者が参加し、科学的情報を収集・共有し、保全と利用を調整する統合的生態系管理のアプローチが不可欠。例えば、ベレテ・ゲラ森林生態系の統合的管理として、行政、生産者組織、援助機関等の関係者参加による管理委員会を組織し、計画に則り、森林保全や認証コーヒーの生産・販売及び持続可能なサプライチェーン構築



に取り組み、活動状況や生物多様性・生態系サービス等の科学的情報が管理委員会に共有され、関係者間の調整により必要な改善を行うなどが考えられる。また、これら成果を森林保全とコーヒー産業振興の国家政策に反映させることも重要である。

(4) 森林再生に向けた民間資金の動員

ベレテ・ゲラの森林は 1995 年の 115,538ha から 99,509ha まで減少した。世界動向を踏まえた生態系の保全・回復のためには、積極的な森林再生が必要であり、そのためには、森林減少・劣化抑制のための REDD+ 資金メカニズムに加え、新たな資金動員が必要である。近年、ESG 投資*の普及により企業の意識改革が求められており、サプライチェーンにおける生物多様性保全や GHG 排出ネット・ゼロに向けて取り組む企業が増加してきている。ベレテ・ゲラにおいて、企業からの民間資金動員による森林再生とカーボンオフセット・スキームを導入し、積極的な森林再生と持続可能な森林コーヒー生産を推進することも一案である。

*「ESG 投資」とは、*Environment* (環境)、*Social* (社会)、*Governance* (企業統治) の三つの要素に着目して企業を分析し、優れた経営をしている企業に投資すること。



◆発表2

森と人々を守る

高橋康夫

(公財)地球環境戦略研究機関 (IGES)

リサーチマネージャー (自然資源・生態系サービス領域)

エチオピアのベレテ・ゲラ森林管理計画プロジェクトの専門家として2011-2012年、2014年の2回派遣。以前は青年海外協力隊としてアフリカ・マラウイの国立公園の調査業務に2年間従事、マラウイから帰国後は環境コンサルタントとして小笠原諸島の世界自然遺産登録に向けた自然再生事業などに携わる。現職では、農林水産業などの一次産業の中で生物多様性を守る取組を世界中で推進する SATOYAMA イニシアティブの助成事業や調査、自然の価値評価研究などに携わっている。



エチオピア森林コーヒーとの出会い

JICA 専門家として、「ベレテ・ゲラ森林管理計画プロジェクトフェーズ2」(2011~2012年)と、「付加価値型森林コーヒー生産・販売促進プロジェクト」(2014年5~6月)に従事した。着任時には認証を取得したコーヒーの半分の出荷が済み、日本に到着するところまで来ていた。しかし、認証は得たものの価格に見合うだけの品質のコーヒーではなかったため、残り半分の販売に苦労した。認証を取れば付加価値が付くという考えの見直しを迫られていた時期であった。

ダイヤの原石

2011年に日本に一時帰国した際に会った UCC コーヒー鑑定士の中平尚己氏による提案で、現地で農民参加のコーヒー品評会を行うことになった。ここでは、(1) 協同組合ごとのコーヒーを皆の目の前で品質評価する、(2) おいしいコーヒーの味を知る、(3) コーヒーの味が悪くなる理由を知ることを実践した。そうしたところ、多くの協同組合のコーヒーにスペシャルティコーヒーの基準に合う評価が与えられるという、参加者皆が驚く結果となった。この他にも、生産者自身が、国際的に評価されて高値で取引されるコーヒーがどんなものなのか、より高値で売れるコーヒーを生産するために何に気をつけなければいけないのかを知る機会になった。



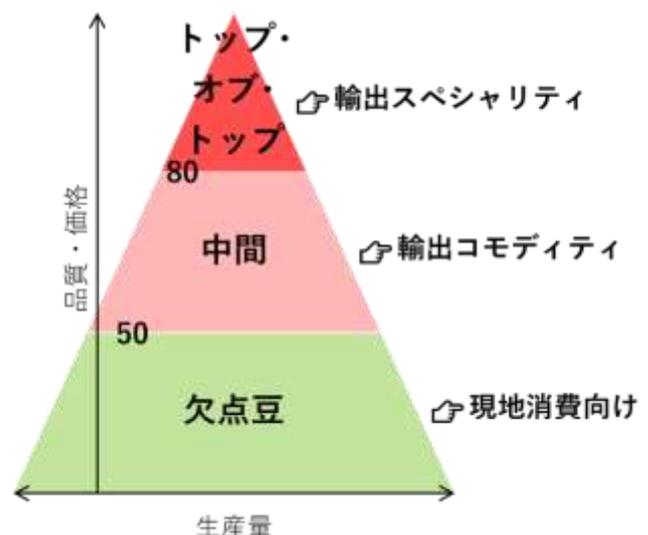
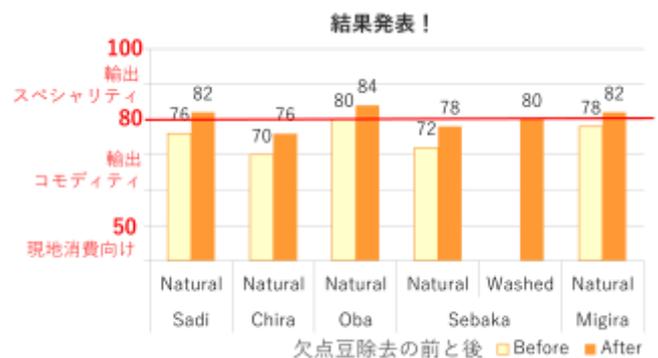
新なる挑戦

品評会によって高品質の可能性が分かり、品質と認証の両立で高付加価値を目指すことになった。森のコーヒーは深く険しい森の中に広がっていて、収穫の際に完熟のものだけを選ぶのが難しく、どうしても未熟や過熟のものが混ざってしまう。これを収穫後、完熟豆だけを厳選したもの、若干の未熟・過熟が混ざったもの、明らかな未熟・過熟や地面から拾ったものの3つに分けて加工・出荷するという方法が提案された。厳選された完熟豆は高値で取引されるスペシャルティ向け輸出用、若干の未熟・過熟混じりはコモディティ輸出用、残りは現地消費用にして、スペシャルティでブランディングすることでコモディティの販売を牽引し、全体の付加価値を高めるという、フラッグシップ・マーケティングという戦略であった。

しかし、現実には、そう簡単にできるものではなかった。当時は舗装道もほとんどなく雨季になると自動車が入れないような奥地。収穫・乾燥したコーヒーチェリーを各家庭で保存し、現金が必要な時に売るという貯金代わりの使い方が根強く残っていた。このような慣習をすぐに変えられるものではなく、豆の品質に応じた価格付けも困難を極めた。買い付け後も、加工所の古い設備や製造ラインの管理など、多くの壁が立ちはだかっていた。さらに、認証基準と農民の日々の生活との間のギャップ、認証への理解不足から、プレミアムで増えた収入で改良品種のコーヒー苗を植え、森を切るというような、認証プログラムの目的に反するような行動も見られるようになった。

森のコーヒーの本当の価値

ベレテ・ゲラの森のコーヒーは、アラビカ種コーヒー発祥地といわれ、本来の生育環境で育ち、独特の風味をもつ。さらに、遺伝的な多様性が高く、新品種の交配に有用なものや気候変動や病虫害耐性に強いものが見いだされる可能性がある。また、コーヒーのもたらす現金所得だけではなく、コーヒーと森が共存することで、森が人々にもたらすさまざまな恵み～例えば旱魃、洪水や土の侵食の予防など～も現地の人の生活の安定や安全にとっては欠かせないものであった。



最後に～迫りくる脅威

コーヒーが自生するような森林は、エチオピア全体で減少の一途を辿っている。さらには、気候変動によって、アラビカコーヒーが自生できるような環境は 2080 年までに半分以上、あるいはほぼ全て失われてしまうという予測もある。こうした中でも、森のコーヒーがもつ多様性、そして森が気候の変化を和らげる作用などによって、既に進みつつある気候変動にも耐えるものが出てくるのではないかと、望みを託している。



◆発表 3

コーヒーツーリズムの可能性

鈴木雅未

元青年海外協力隊隊員

旅行会社にて約5年間勤務した後、2017年1月～2019年1月まで、青年海外協力隊の観光職種の隊員として、エチオピアの南部諸民族州文化観光局で活動。南部諸民族州の観光プロモーションを目指して、海外からも参加者が来るマラソンイベントでプロモーション活動や、南部諸民族州のコーヒーを使ったお土産の試作などを行う。

帰国後は、エチオピアに関わり続けたいという思いから、エチオピアからバラを直輸入・販売等する会社に勤務。

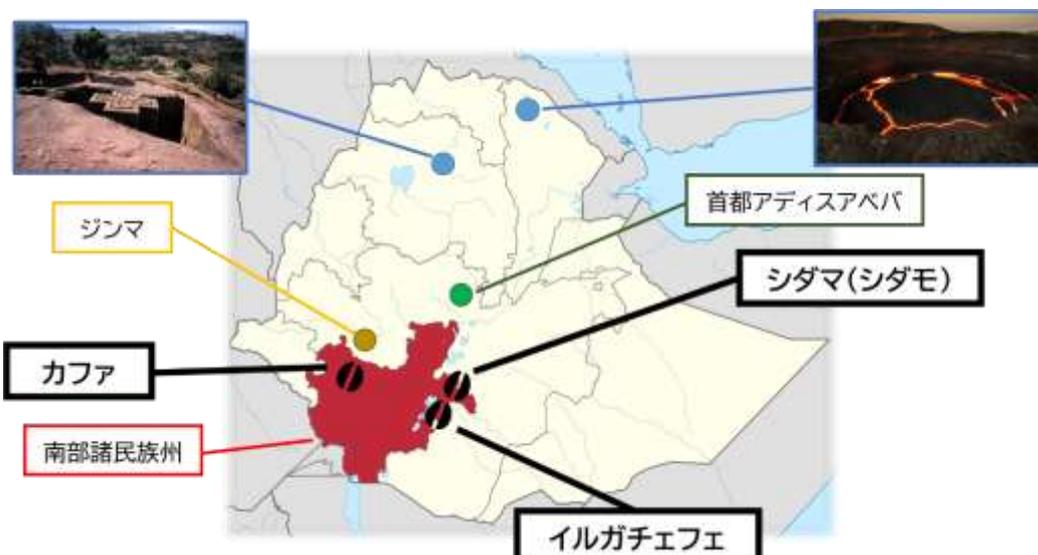


コーヒーとの出会い

協力隊活動は「観光プロモーション」支援で、はじめにエチオピア全土内の人気観光地を調査した。エチオピアといえば、ラリベラ（エチオピア教会）や火山（エルタ・アレ火山）が挙げられるが、私の赴任地はエチオピア南部エリアで、そうした人気観光地からは遠い地域であった。「人気観光地からは遠い赴任地の観光資源は何だろう？」と考えたとき、「コーヒーだ！」と思い、コーヒーを中心に展開していくことを模索した。

コーヒーツーリズムの状況

南部諸民族州にコーヒー産地はいくつかあるが、シダマ、イルガチエフ、カファの3地域に着目した。カファはコーヒーの語源ともいわれている。アラビカ種の起源であり、歴史的にも重要な地域に位置づけられている。これらの地域を訪問し、コーヒーツーリズムの現状を把握した。



シダマ

シダマの中でもイルガレムは、3か所のうち、現時点で最も「ツーリズム」として整備されたエリア。



主な特徴

地元の観光ガイドが、コーヒー農園や伝統的な家、伝統的なコーヒーセレモニーなどを案内してくれる（通年）。コーヒー収穫時期の9月～12月頃であれば、村の子供たちと共に収穫し、果肉を取り除き、焙煎してコーヒーを飲むという体験ができる。また、地元で栽培されるエンセーテ（ニセバナナ）から採れるでんぷんを原料とした、シダマ民族の伝統食のひとつ「オモルチヨ」をコーヒーと一緒に楽しむことができる。近隣には温泉があり、また州都のアワサでは、ハワサ湖でボートトリップや、野生のカバを見たり、湖沿いのフィッシュマーケットに立ち寄りたりできる。

イルガチエフ

世界的に有名なコーヒー産地であるが、観光のための整備が全くなされていない。

主な特徴

観光ガイドはおらず、観光客がコーヒー農園や精製場などを見学するのは難しい。現状では、コーヒー関係者しか来ない。地域にはユネスコ世界文化遺産の暫定リストに登録されている「ゲデオの文化的景観」の一部である「トゥトゥファラ」などの石柱群もあるが、訪れる観光客は少ない。



カファ

コーヒー農園訪問や、アラビカコーヒーのマザーツリーのあるマキラを訪問できるなど、コーヒーツーリズムとしての可能性は高い。



主な特徴

アラビカコーヒー発祥地として知られるカファは緑豊かな町。カファ郊外のコーヒー農家を訪れ、コーヒーを育てている様子を見学できる。農家では、スパイスを育てたり、伝統的な方法で蜂蜜を採取したりして副収入を得ている。コーヒー豆は主に天日干しされる。カファ郊外には野生コーヒーが自生する原生林が広がっている。その中に、全てのアラビカコーヒーがこの木から始まったという伝説が残る、樹齢約 300 年と言われるアラビカコーヒーのマザーツリーもある。カファの町外れには滝もあり、ハイキング・トレッキングができる。町に市場が立つ日には、現地の人々の暮らしぶりを垣間見ることができる。

今後のコーヒーツーリズムについて

首都アディスアベバを起点として考えた時に、①南ルートとして「シダマ」「イルガチエフェ」を回るルート、②南西ルートとして「ジンマ」「カファ」を回るルートが考えられる。それぞれ、コーヒーツーリズムのための資源は豊富である。観光客はコーヒーの知識に加え、産地周辺の自然や文化・生活に触れることができる。また、コーヒーツーリズムによって、地元の農家の副収入につながる。しかし、課題は少なくない。シダマやカファはいくらか観光が行われるようになっているが、イルガチエフェでの観光はまだ未開発と言える。コーヒーを資源として見た積極的な観光振興が行われておらず、観光関係者に知られていない地域が多い。地元の観光ガイドがまだ少なく、コーヒーツーリズムのインパクトが限定的で、観光から収入を得ている世帯が少ない。地元の観光ガイドの育成を行い、コーヒーの生産者組合なども巻き込みながら、周辺産業（伝統工芸など）にもコーヒーツーリズムの好影響が波及するようになればいいと感じている。



質疑応答

生物多様性の保全

Q: 2030年までに生物多様性を回復させるとのことですが、どの状態まで生物多様性が豊かになれば回復したといえるのか。また基準としている時代などはあるのでしょうか。

阪口: ポスト2020年生物多様性枠組み草案には生態系に関する目標案として、2030年までに生態系の減少・劣化を抑制するとともに、減少・劣化した分の生態系を再生させることで、生態系の減少の正味ゼロ（ゼロ・ネットロス）の達成、2050年までに生態系の再生により〔20%〕増加させ、強靱性*を確保するとある。2050年に向けた20%という数値はあくまでも暫定的なものである。また、基準年（ベースライン）についても2020年、さらに遡った時点などの議論がある。数値目標と基準年はセットであり、今後議論されることになる。

*強靱性とは、台風、小規模な森林火災や伐採などの攪乱に対し抵抗力があり、すぐに回復できる健全な生態系が持つ能力。

Q: 自分たちはどうしたらよいのか。森林の減少を食い止めるためには、伐採しなくても収入が得られ、持続可能となるように現状を変えなくてはいけない。

阪口: 現場から遠く離れた日本にいる消費者も行動変化を起こす必要がある。例えば、認証を受けて付加価値のついたコーヒーを購入することで、環境保全につながる等、具体的な行動を起こすことが必要。

森林コーヒーと認証制度

Q: 認証を取った高い評価のコーヒー豆と低い評価の豆ではどれくらいの価格差があるのですか？

高橋: 選別したコーヒー豆を別ルート（スペシャルティコーヒー）で出荷できると、高い値段がつく。私の活動期間中には価格差までわからなかった。

JICAプロジェクト関係者: 現在は、品評会を毎年継続して実施している。ベルテグラでは2か所実施。1Kgあたり、5ブル（20円くらい×1ブル/4円 2019年のレート）、普通のコーヒーより高く買われている。UCCには1.5倍の価格で買ってもらっている。全てのコーヒーが品質に応じて取引されていないが、品評会で高い認証を受ければ、高く買ってもらっている。

Q: 農民側の変化は、「求められる“正解”が分かった」ということが大きな要因だったのでしょうか？品評会以前も、品質が高い豆は買取価格やニーズが高かったと思われ、豆の品質向上に取り組むインセンティブ要因はあったと想像します。しかし、その際には品質へのこだわりが低かったとするならば、経済的な便益ではない要因が、農民の意識変革に重要ということなのだろうか、と疑問に思った次第です。

高橋: 地域の農民は、コーヒーの品質管理や価格交渉を自ら率先してできるような立場ではなかった。それぞれが権利をもつコーヒーの森から収穫したコーヒーを乾燥させて保存して、コーヒー仲買人が来た時に、相手の言い値で売っていた。品

評会の結果やその後のプロジェクトの取組によって、ベレテ・ゲラのブランドで輸出できる、品質向上で付加価値が高まるという理解が徐々に広がり、意識が変化していったのではないかと考えています。

Q：森林分布を示す航空写真をもとにした地図がありますが、ガーデンコーヒーのコーヒーの木が並んでいるコーヒー園は森林として扱われるのでしょうか？それとも森ではなく、開拓された畑として把握されるのでしょうか？ベレテ・ゲラでは森林コーヒー、セミフォレストコーヒーからガーデンコーヒー化が進んでいると聞いています。

高橋：背の高い木、中くらいの木など木が層になってコーヒーの木の上を覆う自然林のようなコーヒーの森から、シェードツリーがまばらにあるだけの、ほぼコーヒー農園といったものまで多様な「コーヒーの森」がある。

JICA プロジェクト関係者：森林コーヒープロジェクトのフェーズ 2 で林と住居地域を分けた。樹高 5 メーター、樹冠率 *20%を森として定義した。森林地域すべてにコーヒーがあるかどうかはまだ確認できていない。農民はオロモ民族だが、森を大事にする人々であることがプロジェクトとして成功に繋がったと考えている。

*樹冠率：真上から見たときに樹冠（樹木の枝と葉が集まっている部分）が地表に対して占める割合。

Q：森のコーヒー認証に必要な認定料というものは誰が負担しているのでしょうか。

高橋：私が担当していた当時は、JICA プロジェクトのカウンターパートで、協同組合からコーヒーを買い付け、加工、輸出する役割を担っていたオロミア森林公社が、輸出の売り上げから支払っていた。

Q：住民にとっての認証コーヒー取得に必要な労力と、得られる金銭や精神的達成感？等の利益のバランスはどのようなものなのでしょうか。

高橋：精神的達成感は人それぞれだろうが、プレミアムが上がることで、インセンティブに繋がっている。

Q：民間資金動員による森林再生とは、どのようなものがあるのでしょうか。

吉倉：REDD+という森林減少抑制への活動に資金を投入する仕組みがある。また、阪口氏の報告にあったような民間からの ESG 投資による資金を活用することも期待される。

*REDD+：途上国における森林減少・劣化の抑制や持続可能な森林経営などによって温室効果ガス排出量を削減あるいは吸収量を増大させる努力にインセンティブを与える気候変動対策の枠組み。

コーヒーツーリズム

Q：コーヒーツーリズムは、鈴川さんがいらした時点でどれだけの観光客が来ていましたか。ツーリズムにはルートやビジターセンター、宿泊施設などのインフラ整備が欠かせませんが、インフラ整備は進んでいますか？

鈴川：観光客のうちのコーヒーを目当てにした人たちの割合は分からない。宿泊インフラは十分とは言えないが、外国人観光客が使える施設はある。シダマの伝統的家屋スタイルのロッジもある。

Q：コーヒーツーリズムでは、1 回あたり何名程度で費用はどのくらいなのでしょうか。また定期的実施されているのでしょうか。課題としてプロモーション不足とのことでしたが、現在参加される方はどのようにしてツーリズムについて知り、参加するのでしょうか。

鈴川：日本とエチオピア間の航空運賃は、新型コロナウイルス前は10万円台で行けたが、航空便が制限されている現在は40万円台まで高騰していると聞く。日本でコーヒーツーリズムを扱っている旅行会社は少ないが、道祖神等が行っており、旅行代金は30万から50万円。

Q：オンラインコーヒーツーリズムを是非実施してください！やはり現地の状況（自然環境や人々の顔や生活の様子など）を体験すると理解が深まるだけでなく納得感が得られますよね。でもなかなかエチオピアまでは行けない。でもオンラインならできますよね。先ほどのような録画したビデオでも良いと思います。森林コーヒーを飲みながらのオンラインツーリズムの開催をご検討ください！

白鳥くるみ：コーヒーツーリズムは、以前からアフリカ理解プロジェクトでも支援している。オンラインコーヒーツーリズムも計画中です。

Q：コーヒーツーリズムに対する政府からの支援はありますか？

鈴川：シダマで実施したコーヒーイベントは1回で終わってしまった。シダマの南部州からの独立が決まり、今後、地元の産業開発への支援が進むかもしれない。

クロージング

森のコーヒー勉強会で扱う課題は、エチオピアの森林とコーヒー、生物多様性、そしてそこに住む人々の暮らしのことだけではない。日本にいる我々との関係も含めた課題だ。これまで、経済と環境のことを取り上げてきたが、次回（9月）は、いよいよ日本での企業の取り組みや消費者の行動を取り上げるので、ご期待いただきたい。

アフリカ理解プロジェクトがおすすめする参考資料

- ・ 伊藤義将/コーヒーの森の民族生態誌—エチオピア南西部高地森林域における人と自然の関係 (京都大学アフリカ研究シリーズ)/2012年/松香堂書店
- ・ 石脇智広/コーヒー「こつ」の科学/2008年/柴田書店
- ・ 臼井隆一郎/コーヒーが廻り世界史が廻る/2008年/中公新書
- ・ 丹部幸博/コーヒーの世界史/2017年/講談社現代新書
- ・ 辻村英之/おいしいコーヒーの経済論/2009年/太田出版
- ・ 松見靖子/森は消えてしまうのか？/2015年/佐伯印刷出版事業部
- ・ ペトリ・レッパネン+ラリ・サロマー/世界からコーヒーがなくなるまえに/2019年/青土社
- ・ プロマーコンサルティング/高収益農業研究：アフリカのコーヒー産業と日本の貿易・援助－タンザニアとエチオピアのコーヒー産業及び輸出促進に対する支援策等－
http://www.promarconsulting.com/site/wp-content/uploads/files/Coffee_Final.pdf
- ・ マイケル・ワイスマン/スペシャルティコーヒー物語/2018年/楽工社
- ・ 吉倉利英/2020年/コーヒー発祥の森は消えてしまうのか？－エチオピア森林コーヒーの保全と付加価値化－/海外の森林と林業 No.107
- ・ ロブ・ダン、世界からバナナがなくなるまえに/2017年/青土社
- ・ IPBES/生物多様性と生態系サービスに関する地球規模評価報告書－政策決定者向け要約/2019/サンドラ・デアズ他/環境省・IGES 翻訳 <https://www.iges.or.jp/jp/pub/ipbes-global-assessment-spm-j/ja>

アフリカ理解プロジェクトの本

- ・ 織田雪江/コーヒーモノガタリ (改訂増補版) /2019年、アフリカ理解プロジェクト
- ・ 白鳥くるみ/原木のある森・コーヒーのはじまりの物語-エチオピアコーヒー伝説-/2009年/アフリカ理解プロジェクト
- ・ Africa Rikai Project/The Legend of Ethiopian Coffee/2012/Africa Rikai Project

参加者アンケートから

参加者の構成

年齢



■ 20代 ■ 30代 ■ 40代 ■ 50代 ■ 60代 ■ 60代～ ■ 不明

職業



■ 会社員 ■ 援助機関 ■ コンサルタント
■ フリーランス・自営 ■ 教員 ■ 学生
■ その他・不明

参加者からのコメント

- ・ フェアトレードの商品を買ってエチオピアの農家さんの経済が豊かになってほしいと思った。また、周りにも広めていこうと思った。
- ・ 森林保全と、その地域に住む人の話を聞いたことが良かった。
- ・ ベレテ・ゲラのコーヒーについて新しい知識を習得することができ、よかった。
- ・ 過去 2 回の勉強会に参加していたこともあり、第 3 回目の開催を大変楽しみにしていましたが、今回もとても勉強になる、あっという間の 2 時間だった。
- ・ 他では聞くことができない政策と現場レベルのお話が聞いて興味深かった。
- ・ コーヒーツーリズムに興味を持ちました。日本に住む私たちがどうしたら遠い国の自然を守っていくお手伝いができるのか？
- ・ 認証を取るだけでは販売量増加には結びつかないという点、それ以外の付加価値が必要である点というのが、参考になった。
- ・ 各トピック間の整合性が取れていたら、より学べたと思う。

- ・ 森林保全と、その地域に住む人の話を聞いたことが良かった。
- ・ 隊員の方の話がわかりやすいのは、やはり現地の方々との生活を通じた繋がりがあからなのかと思った。ただ、気候変動による環境汚染で、森がどんどんなくなっていく事は、早くなんとかしないといけないと思った。
- ・ 付加価値型コーヒーといっても、品質はやはり大切となってくる話など、非常に興味深く話を伺うことが出来た。
- ・ 森林保全のみでなく、生態系サービスや生物多様性を絡めることで、森林分野の関心を持っている人間以外も対象者とするという方法も考えることが出来、学びの多いワークショップだった。
- ・ 森林コーヒーを育むエチオピアの森林生態系の保全が最終目的となる中、コーヒーに付加価値をつけることによるローカル生産者の方々の意識改革へつなげられる期待がある一方、経済的な付加価値への期待による過度の開発に引き金にもなる危うさを感じ、そのバランスのハンドリング、介入ポイントが非常に難しいなと感じた。
- ・ 根本的に森林減少の課題は、気候変動問題と切り離せないと考える。次回の落とし所、消費者である私たちのとるべき行動の話が、単にコーヒーの生産消費や森林コーヒーを支えるという話題にとどまらず、付随した環境アクション、脱炭素や脱プラスチック等にも向かうことを期待している。
- ・ 直接会ってお話してみたい方ばかりだった。
- ・ アフリカに一度は行ってみたいと思っており、行くならコーヒーツーリズムのように現地を見てみたい。はちみつを作っている農家にも会いたい。

オンライン講座について

- ・ 初のオンラインでしたが、これはこれで参加しやすかった。
- ・ ZOOM でもストレスなく参加することができた。
- ・ オンライン開催にはオンラインの良さがあることを実感した（資料が見やすい、声が聞きとりやすいなど）。
- ・ オンラインでの開催は大丈夫かなと思ったが、想像していたより面白かった。
- ・ ZOOM だと、ビデオ配信が難しいと感じた。
- ・ 質疑応答も対面とは違った意味でなかなか充実していた。
- ・ 地方に住んでいるので、今回の様なオンライン開催はありがたかった。

アンケートへのご協力ありがとうございます。

いただいたご意見を参考に、より良い勉強会に向け改善していきます。

発行：アフリカ理解プロジェクト www.africa-rikai.net

報告書文責：アフリカ理解プロジェクト

発行日：2020年7月8日

